

毎日新聞

9

11版

2000年(平成12年)2月27日(日曜日)

本と出会う—批評と紹介

証言 水俣病

中村 桂子 評

標題を見ただけで、多くの方がさきま...

でもそれは違う。本書は、一九九六年に開催された「水俣・東京版」...

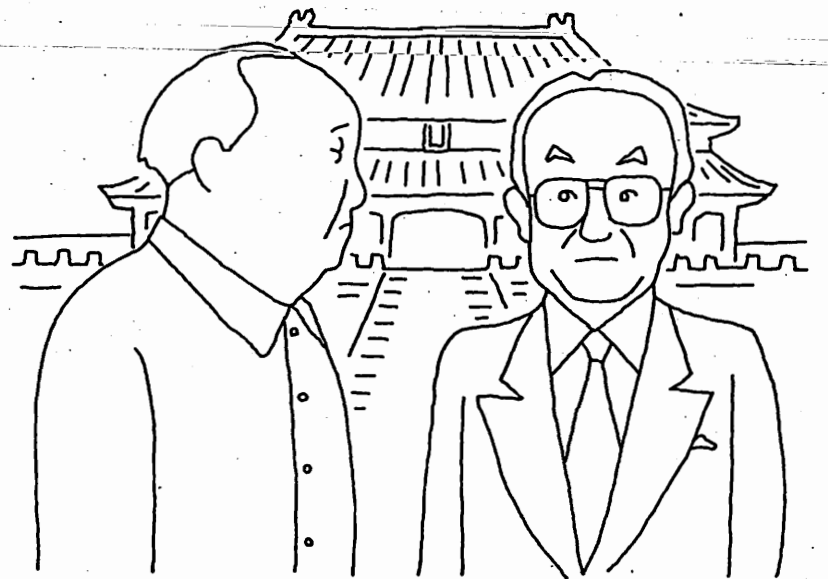
生命を粗末にしない社会のために

栗原彰編(岩波新書・600円)
「これは事件ではない。これが本...

この人・この3冊

- ①毛沢東伝 (貝塚茂樹著/岩波新書/品切れ)
②毛沢東 その詩と人生 (武田泰淳、竹内寅著/文藝春秋/絶版)
③毛沢東主義 (アイザック・ドイッチャー著/山西英一訳/新潮社/絶版)

中嶋 嶺雄・選



和田 誠

二十世紀の世界を、そして全中国の隅々までをひっきりまわった毛沢東。現代中国の赤い皇帝への評価は、今日、大きく変わってしまったけれど、毛沢東神話の形成に与か...

的な独裁体制の対極に位置する民衆的指導者と映ったのだ。このふたつの毛沢東像は、硬骨の中国文学者・竹内好の毛沢東論によってまず定型化されたと言ってもよいであろう。竹内は早くも中国革命直後の一九五二年に「かれ(毛沢東)の文章はいかにも生き生きして見える」「かれの人間性に残虐を立証する要素は一つもない」「かれは一種して民主主義の實現を目標にしている」と毛沢東を描いている(猪木正道・竹内好・織山芳郎著『スターリン・毛澤東・ネル』、要書房)。こうした毛沢東像を中国革命史に照らして本格的に掘り下げたのが貝塚の『毛沢東伝』(五六年)であった。著者は、「私が毛沢東伝において追求したのは、この毛沢東の人間らしさであった」と結んでいる。一方、武田の共著者・竹内寅は毛沢東「その時と人生」(六五年)で毛沢東の詩心を現代中国史の各断面で照射するが、毛沢東の詩心を掘り出しているだけに、現時点での竹内の意見を聞いてみたい。国際的には、これらの毛沢東評価とは全く異なる毛沢東論もあった。「奇き蟻たちの皇帝」と題されたハンガリーからの亡命知識人G・パロツキー(ホルヴァートの『毛沢東伝』(講談社文庫)がそれである。そして「トロツキイ伝」三部作で知られるドイッチャーは、『毛沢東主義』(六五年)で「毛沢東主義とスターリン主義とのあいだにはまた、否定しえない近似性も存在している」と断言し、若き日の毛沢東に大きな共感と部分的な強い反発を感じさせたものである。

「この人・この3冊」は、東京外国語大学長の中嶋嶺雄氏にお願いした。1938年、長野県生まれ。64年の『現代中国論』で「毛沢東思想」を批判。著書に文化大革命を権力闘争の大衆運動化と論じた『北京烈烈』をはじめ『中ソ対立と現代』『知識人と論壇』などがある。書評の清水徹氏は仏文学者、近著に『書物の夢 夢の書物』『読書のユートピア』など▽中村桂子氏はJ生命誌研究館副館長、近著に『北里栄三郎 破傷風菌論』『食卓の上のDNA』など▽渡辺保氏は演劇評論家、淑徳大学教授、近著に『歌右衛門伝説』『芸の秘密』など▽鹿島茂氏は...